

011	編集長独白
013	表紙の時計／ブランパン「L'Éboulis」シモン・トゥールビヨン・カルーセル
015	Editor's Choice!
024	シヨーム・オルタンシア・クリエティブ・コンプリケーション／Hモザイク・ベンチャー・トゥールビヨン・デュアルタイム・ミッドナイトブルー／ヴァシロン・コンスタンタン・オーヴァーシーズ・クロノグラフ・限定モデル／オメガ・シーマスター 300 マスター・コーアクシャル／ゼニス・クロノマスター 1969 トリビュート・トゥ・ザ・ローリング・ストーンズ／パネライ・ラジオミール 1940 スリー・デイズ・チエラミカ 48mm／ハリー・ウィンストン・HW・プルミエール・プレシヤス・バタフライ・オートマティック 36mm／シャネル・ボーイフレンド
026	世界は時計で回っている。
028	オードマ・ピゲ・ロイヤル・オーク・コンセプト・ラップタイマー・ミハエル・シユーマツハ
030	これぞまさしくレーシング仕様のクロノグラフ登場
032	パテック・フィリップの2015年新作
036	ノーチラス・Ref. 5711/1R／カラトラバ・Ref. 6000G／クロノグラフ・Ref. 5170G
040	ハリー・ウィンストン・HW・アベニュー・デュアルタイム・オートマティック & プロジェクト Z9
043	新たな個性の創造を目指して
045	さらなる進化を求めて飽くなき探求
046	エルメス・スリム・ドウ・エルメス
047	時計らしさにエルメス流ウィットを加えた新コレクション
048	ジャケド・ロー・チャーミング・バード & レディ8フラワー
049	時計師ジャケド・ローに捧げる今日のオートマトン
050	ヴァンクリーフ & アーベル・レディ・アーベル・ユール・フィラント
051	「星に願いを」。流れる星のロマンを宿したコンプリケーション
052	グラスヒュッテ・オリジナルとモリッツ・グロスマンを訪ねて
053	蓄積と挑戦——向かい合うふたつのグラスヒュッテの高級時計

6月に訪れたグラスヒュッテの時計博物館では「ドイツ民主共和国時代のグラスヒュッテ」と題したテーマ展を開催していた。ドイツ民主共和国の時代、グラスヒュッテには時計製造の人民公社GUBが存在したが、これが今日のグラスヒュッテ・オリジナルに受け継がれた。そしてグラスヒュッテ・オリジナルの向かいには新進ブランドのモリッツ・グロスマンが社屋を構える。ふたつのドイツ高級時計メーカーを取材した。

075 マニユファクチュールロワイヤル
才気とエネルギーが生み出す意外性

081 ロマン・ジエローム コレクション

あの瞬間を封じ込めたタイムマシン

「人類の記憶に残る伝説のDNA」をコンセプトに2004年に創業して以来、ユニークなモデルを生み出しているロマン・ジエローム。アーティスティックなデザインのひとつひとつがアポロ宇宙船や月、あるいはタイタニック号の物語を語りかける。今日ではインベーターゲームやパックマンも登場し、バリエーションを広げている。コレクションの概要を代表モデルとともに紹介。

089 バルミジャーニ・フルリエ 第1回

未来への道を開く堅牢な基礎固め

ミシエル・バルミジャーニ氏の修復工房に端を発するバルミジャーニ・フルリエは、サンド・ファミリー財団の支援を得て、今日、自社一貫製造体制を整えた。バルミジャーニ・フルリエを支える5社を取材した。

098

時計ジャーナリスト瀧澤 広の「マイ・チョイス」第18回イクエーション・オブ・タイム
ブレゲ・クラシック・パーペチュアル・イクエーション・オブ・タイム

100

ロンジン エレガンス 第3回
ロンジン パルスメーター クロノグラフ & ロンジン コラムホイール
シングルプッシュピース クロノグラフ

102

ロンジン デイアヌ賞と一新したロンジンドルチェヴィーターコレクション

106

TASAKI タイムピース
日本のハイジュエラーから誕生した日本の時計

110

ラドール ダイアマスター グランドセコンド
クラシカルなデザインで新しいラドールを切り開く

112

腕時計新着情報

121-128

インフォメーション / 問い合わせリスト / 次号予告

オーデマ・ピゲ ヲロイヤルオーク・コンセプト・ラップタイマー・ミハエル・シューマッハ

これぞまさにレーシング仕様のクロノグラフ登場

筆者はヒストリックカーが大好きで、レースにも参加していた。そこで実感したのが、巷にあるスプリット・セコンド・クロノグラフはレース向きではないことだった。ところがオーデマ・ピゲの新作に触れてみて、驚いた。シューマッハの名に恥じない、本物のレーシング仕様だった。

趣味を100パーセント主目的としたアマチュアのヒストリックカー・レーサーたちが集うサーキットでは、事のほか多く機械式のクロノグラフ・ウォッチを填めた人を見かける。やはり旧いクルマと機械式のリストウォッチは切り離せない関係にあるのだろう。

だが、彼らの腕のクロノグラフは、単なるお飾りではない。たとえばこれは、コースを走行中のマシン——それは自分のチームでもライバル・チームのマシンであつてもよいのだが——がどのくらいのタイムを出しているのかを「気軽」に知るための重要な道具なのである。

もちろん、これとは別にピットの中にはタイムキーパー専用のハンド・ストップウォッチが用意されている。少しだけ詳しく説明すれば、そのストップウォッチは最低でも2個以上が必要だ。何故なら、1個だけでは周回しているマシンのラップタイムを取り続けることができないからである。

では、左腕に填めたクロノグラフ・ウォッチは、ピットの中では役に立たないかと

言えば、残念ながら答えは、そのとおりである。またちょうど良い機会なので、スプリット・セコンド・クロノグラフにも触れておこう。専門誌などに「1位と2位のタイムを計るのに便利である云々」と書かれているのをまま見かけるが、それは少々違っている。まず2台で争うマシンのタイムを取るためには、間合いを置かず、続けてふたつのプッシュ・ボタンを押す必要がある。このため、マシン同士が接近した状態での計測はほとんど不可能だ。しかも、近年ケース・サイズが大きくなったとはいえ、限られたスペースしかもたない腕時計に組み込まれたストップウォッチでは、ほとんど重なった2本の針からそれぞれのタイムを読み取ることは絶対に無理なのである。

さて、前置きが長くなってしまったが、ここに紹介する最新のロイヤルオーク・

コンセプト・ラップタイマー・ミハエル・シューマッハは、こうしたサーキットでの使いにくさを払拭したまったく新しいクロノグラフである。それはネーミングからも分かるように、F1レーシング・ドライバーのミハエル・シューマッハのアイデアから誕生したもので、「コース脇から、ラップタイムを正確に把握できる」よう、一から設計された特別なクロノグラフでもある。

細部を見てゆこう。ロイヤルオーク・コンセプト・シリーズの8番目となる本機には、これまでどおりアグレッシブな外観と、先進的なメカニズムのふたつが備わっている。

まず、5気圧防水機能を装備した直径44mmのケースは、軽量かつ弾性/耐熱性に優れたブラックのカーボン・ファイバーを主構造としており、これにチタニウム製のベゼルとケースバックが付帯する。もちろん、一種独特な「風味」を醸し出しているのは前衛的なオープンワークが

施されたブラックの文字盤で、さらにラバー・ストラップもブラックでカラー・コーディネイトされるのが特徴だ。

いっぽう、新開発の手巻き式クロノグラフ・ムーブメントは、リ・スターティング・フライバックとスプリット・セコンドの両機構を備えたCal. 2923である。サイズはクロノグラフとしてもやや大振りな直径34・60mm×厚さ12・70mmで、34石、2万8800振動、パワーリザーブ約80時間のスベックをもつ。

このほかの要素として、ムーブメントにはツイン・バレルや3基のコラム・ホイールなどが組み込まれているものの、実はこうしたスベックだけで本機を語るのには難しい。つまり、最大の特徴はその使い方にあるからだ。

写真を見て戴きたい。中央にセットされているのが2本のクロノグラフ針で、3時の位置に置かれているのが30分積算計である。プッシュ・ボタンは右上がスタート&ストップで、右下がリターン、左

側がスプリット用と、その配置はごくごく一般的なスプリット・クロノグラフである。従って、通常の使い方をする限りリ・スターティング・フライバック機構を備えたクロノグラフとして、いちいち帰零することなしに再スタートが図れるほか、2本のクロノグラフ針を順番に停止させ、スプリット・セコンド・クロノグラフとして使用することができる。

だが、本機が本領を発揮するのは、ここから先である。即ち、クロノグラフ機構をスタートさせ、続いて1本目のクロノグラフ針を留めたのち、スプリット・セコンド用のプッシュ・ボタンを駆使することによって、①ストップ&ゴーを交互に繰り返す2本の針から、毎週のラップタイムを計ることが可能で、さらに②毎回のラップタイムを取りながら、ファステスト・タイムまでを知ることができるのである。正直なところ、卓越したアイデアと、そのアイデアを具現化した技術力には、まさに舌を巻く思いであった。

この最新のロイヤルオーク・コンセプト・モデルは、ピットに置かれたストップウォッチの代役を務めることができる唯一のクロノグラフ・リストウォッチである。できることならば、これを実証すべく、腕に着けて今すぐにでもサーキット・コースへ出向きたいところである。



44mmのフォージド・カーボン・ファイバー・ケースに、新機軸のスプリット・セコンド・クロノグラフを詰め込んだロイヤルオーク・コンセプト「ラップタイム・ミハエル・シューマッハ」。その特徴は、通常のクロノグラフ、スプリット・クロノグラフに加えて、毎回のラップタイムの計測ができること。ミハエル・シューマッハがF1時代に獲得した入賞の数と同じ221個の限定生産で、価格は2948万4000円。



パテック・フィリップの2015年モデル

ノーチラス Ref. 5711 / 1R / カラトラバ

Ref. 6000G / クロノグラフ Ref. 5170G

パテック・フィリップの今年の新作のなかで話題作は前号の表紙に掲載したカラトラバ・パイロット・ウォッチだった。もちろんそれ以外にもスプリット・セコンド・クロノグラフやブラック・エナメルの文字盤など、話題は尽きないが、2回にわたって新作の一部をご紹介します。

年毎に、何かしらの話題を提供してくれるパテック・フィリップの新作モデルであるが、2015年の今年には、①アヴェイション・ウォッチ、カラトラバ・パイロット・トラベルタイムの復活、②近年、パテック・フィリップが力を入れている新しいブラック・エナメル・ダイヤルをまとった、これまた懐かしい、スプリット・セコンド・クロノグラフの登場、③シンプル・ノーチラスに、久々となる豪華なゴールド・ケース&ブレスレット・モデルが追加された、ことなどである。

また、あまり話題にはなっていないものの、今年のもうひとつの特徴はブルーの文字盤を装備した新作が、合計で8モデルも追加されたことだ。近年の流行であるブルー・ダイヤルは、すでに昨年までに10機種以上が生産されていたにも関わらず、にである。しかも、丁寧なことに、これらはそれぞれに色味の異なるブルーなのだから恐れ入ってしまう。



カラトラバRef.6000G。4時位置の小秒針に加えてボイランター式のデイト表示を備えた“Ref.6000”はカラトラバ・シリーズの中にあって、やや異端的存在といえる。そのルーツは1990年代に限定生産された“Ref.5000”にあり、2005年に18Kホワイトゴールド・ケースでデビューを果たす。今年の2015年モデルでは、このホワイトゴールド・モデルに、新色のブルー・ダイヤルが加わった。これにより、昨年までのグレー・ダイヤルは生産中止となるいっぽう、18Kローズゴールド・モデルは引き続き生産される。

ケース：直径37.00mm×厚さ10.15mm、18Kホワイトゴールド、シースルーバック仕様、3気圧防水/ムーブメント：Cal.240PSオートマティック(27石、2万1600振動、パワーリザーブ最大48時間) / 価格：340万2000円



ノーチラスRef.5711/1R。1976年にデビューしたパテック・フィリップのスポーツ・モデル、ノーチラスは2006年に3代目となる現行モデルが登場し、これ以降、年を追うごとにバリエーションを増やし、2013年には18Kローズゴールドのケース&ブレスレットのクロノグラフ“5980/1R”が登場。そして、その翌年にはステンレス・スチール・ケースにトラベル・タイム+クロノグラフ・ムーブメントを組み込んだ“5990/1A”がデビューした。

2015年の今年、シンプルなデイトつき3針モデルの“Ref.5711”シリーズに、前作の“Ref.3800”以来となるゴールド・ケース&ブレスレット仕様(ジュエリー・バージョンを除く)が加わった。18Kローズゴールド・ケースに合わせた新作のダイヤル・カラー、ブラウン・グラデーションはこの新作ノーチラスをより一層きらびやかに見せてくれる。

ケース：2時~8時40.0mm×厚さ8.3mm、18Kローズゴールド、シースルーバック仕様、12気圧防水/ムーブメント：Cal.315SCオートマティック(29石、2万1600振動、パワーリザーブ最大48時間) / 価格：618万8400円



クロノグラフRef.5170G。それまでの“Ref.5070”の後継機として2010年にデビューした“Ref.5170”は、ヌーベル・レマニアに代わる最新の手巻き式ムーブメントを搭載した2プッシュ/2カウンター式のクロノグラフ・モデル。昨年まではホワイト・ダイヤルの周囲にパルスメーターをプリントした18Kホワイトゴールド・モデルのみが生産されていたが、今年からはそのパルスメーターを省き、インダイヤルの径を拡大したブラック・ダイヤル仕様を追加された。これだけでも雰囲気はがらりと変わり、全体にシャープさを増した。

ケース：直径39.4mm×厚さ10.9mm、18Kホワイトゴールド、シースルーバック仕様、3気圧防水/ムーブメント：Cal.CH29-535PSオートマティック(33石、2万8800振動、パワーリザーブ約65時間) / 価格：983万8800円



グラスヒュッテ・オリジナルとモリッツ・グロスマンを訪ねて

蓄積と 挑戦

向かい合うふたつの
グラスヒュッテの高級時計製造

グラスヒュッテの鉄道と

それに沿って流れる川を挟んで

ふたつの時計メーカーが向かい合っている。

片や旧東ドイツ時代の国営時計工場GUBを

ルーツとするグラスヒュッテ・オリジナル、

片や2009年創業のモリッツ・グロスマンだ。

前者は体制も製品も全く異なるとはいえ

人も機械もGUB時代からの蓄積が財産だ。

一方、後者は時計師モリッツ・グロスマンへの

オマージュを根底に、新しいグラスヒュッテの

高級時計作りに挑んでいる。

今年6月、このふたつのメーカー取材した。



モリッツ・グロスマン本社



グラスヒュッテ・オリジナル本社

マニユファクチュールロワイヤル
才気とエネルギーが
生み出す意外性

マニユファクチュールロワイヤル、
この名前の起源は18世紀に遡る。
啓蒙主義の思想家、ヴォルテールは晩年、
ジュネーブ近郊に住み、1770年、
高級時計ブランド「マニユファクチュール
ロワイヤル」を創業した。
2010年、忘れ去られていたその名が、
ジュラ山脈で甦った。



写真は「オペラ」のケース・サイド(上)と裏蓋側(右)。

ロマン・ジエロームコレクション

あの瞬間を 封じ込めた タイムマシン

時計たちがそれぞれに物語をささやき、
歴史の瞬間へと誘い込んでくれる。
これほど「語る」時計もないだろう。
タイタニック号を語り、アポロを語る。
独創あふれるデザインのなかに
歴史を封じ込めた時計は、
タイムマシンであり、後の世に
語り継ぐための記憶装置でもある。



パルミジャーニ・フルリエ 第二回
未来への道を開く
堅牢な基礎固め



パルミジャーニ・フルリエの基盤を支えるサンド・ファミリー財団は技術革新、持続可能な開発、雇用の創出という目的の下、薬品、農産業、ホテル、先端技術、そして時計産業への投資を行っている。時計師ミシェル・パルミジャーニ氏と彼らとの出会いがスイス時計業界に新しい道を開いている。